

## ストレスアクセント記述研究管見：フィールドワーカーの視点から

その他（別言語等）のタイトル	On a Descriptive Study of a Word-stress System : From a Fieldworker's Point of View
著者	三村 竜之
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	72
ページ	18-35
発行年	2023-03-22
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/00010876">http://hdl.handle.net/10258/00010876</a>

# ストレスアクセント記述研究管見 -フィールドワーカーの視点から-\*

三村 竜之\*<sup>1</sup>

(原稿受付日 令和 4 年 7 月 11 日 論文受理日 令和 5 年 2 月 9 日)

## On a Descriptive Study of a Word-stress System From a Fieldworker's Point of View

Tatsuyuki MIMURA

(Received 11<sup>th</sup> July 2022, Accepted 9<sup>th</sup> February 2023)

### Abstract

There have been much scholarly work on word-stress systems around the world, and many theoretical issues seem to have been solved. However, several questions will still soon arise once you conduct field researches on a stress accent language: *How do we verify it's accent system as word-stress system? What prosodic features does a stress accent language has to have? Is it always straightforward to elicit word-stress patterns in research interviews? Is a stress accent language which has another prosodically distinctive feature still diagnosed as a stress accent language?* In the present paper, the author, who has been involved with descriptive investigation into the word-stress systems of the North Germanic languages, attempts to resolve these questions based on his experience and knowledge acquired through descriptive field researches.

Keywords: stress accent, field research, descriptive linguistics, the North Germanic languages, phonological/phonetic optimization, syllable weight, tempo, tune/intonation

---

### 1 背景と目的

筆者はこれまで 20 余年に渡り、デンマーク語やノルウェー語、アイスランド語といったストレス（強さ/強弱）アクセントを持つ北ゲルマン諸語の音声・音韻面の研究を、記述言語学の枠組みで進めてきた。ストレスアクセントという現象それ自体に関しては、窪菌(2002)<sup>(2)</sup>や早田(1998)<sup>(3)</sup>などの論考を通じてその本質的側面が明らかとされてはきたものの、いざ聞き取り調査（フィールドワーク）を行ってみると、

---

\*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

筆者が研究対象とする諸言語に関しては先行研究の論究やそこから導かれた結論からは逸脱すると思しき事例も観察され、一筋縄にはいかない。ピッチ(高さ/高低)アクセントや声調の場合は、その音声特性ゆえに、聞き取り調査の困難さはフィールドワークの経験のない者であっても想像に難くない。翻ってストレスアクセントの場合は、敢えて聞き取り調査を通じて一次資料の採取を行う研究者がそもそも少ないことも手伝ってか、聞き取り調査やそれに基づく分析・解釈の難しさについては意外と理解されていないように思われる。特に、ストレスアクセントであるか否かの判定(diagnosis)に関しては Gordon and van der Hulst (2020: 75-76)<sup>(4)</sup>も指摘するように困難な点が多く、ストレスアクセント(Gordon and van der Hulst の用語では word-stress)は未だ数多くの問題が残されていると言っても過言ではない。

そこで本論考では、ストレスアクセントにまつわる諸問題の中でも、とりわけその定義や判定基準、一般特性を取り上げ、筆者のこれまでの調査経験に基づきフィールドワーカーの視点から問題点を考察する。併せて、これまでの聞き取り調査において実際に生じた様々な技術的な問題点やその解決策を提示することで、先に述べたストレスアクセント全般に関する本質的かつ理論的な問題点の考察をより深めていく。最後に、今後の課題として、筆者が実際にフィールドワークを行うには未だ至っていない言語から例を引き、ストレスアクセントの本質や一般特性に関する可能性について私見を述べたい。

## 2 アクセントの記述研究

### 2.1 筆者のアクセント観

既にこれまで、度々、拙論において触れてきてはいるが(三村 2014<sup>(5)</sup>, 2022<sup>(1)</sup>)、本稿における筆者の議論を適切に理解してもらうためには必須の概念であるため、重複の誹りを受けつつも改めて筆者の考える「アクセント」とは何かについて述べておくことにする\*2。

「アクセント」という用語を用いて何を意図するかは研究者により微妙に異なることがあり、また言語の音声的側面を扱う音声学と音韻論の間でも「アクセント」の概念は異なることがある。さらに、仮に音韻論の領域に限定したとしても、研究対象とする言語が異なれば、アクセントという用語の意図する概念が異なることもある。そこで本節では議論の出発点として共通の理解を図るべく、筆者の唱える「アクセント論」的なアクセントの捉え方について述べておく。

筆者の考えるアクセントを一言で述べるならば、ある音声特徴を利用して形作られる、特定の言語社会において慣習的に共有された語の「(抑揚や卓立の)型」である(なお、ここで「語」と呼ぶものは、厳密にはアクセントを担うまとまり、いわば「アクセント単位」とでも呼ぶべきものであるが、議論が煩雑になるのを防ぐために、ここでは便宜的に「語」という用語を用いる)。従って、アクセントが個々の言語において具体的に実現する際の音声実質は、アクセントそれ自体を定義する上では重要ではない。典型的には、例えば日本語に代表される「(音の)高さ/ピッチ」や英語に代表される「(音の)強さ/ストレス」といった音声特徴が利用されるが、先に述べた機能が果たされる限りにおいては、「声門狭窄」や「喉頭緊張」、「(音の)長さ/量(quantity)」といった音声特徴であっても理論的には可能である。

また、利用される音声特徴は、語を構成する分節音(語音)の情報から規定されるものではない。無論、アクセントの具体的な実現には分節音が影響を与えることはありうるが、アクセントの本質的な部分は分節音に固有の音声特性とは切り離されるものである。だからこそ、言語によっては、アクセントが語の知的意味の弁別に寄与しうるのである。

なお、このような「弁別(的)機能」はアクセントの主たる機能ではなく、むしろアクセントが有する本来の特性から派生的に生じた、いわば副次的な機能であると筆者は捉えている。というのも、仮に、超分節の特徴によって作られた「型」が一種類しか無く、従って最小対が存在しない場合であっても、その「型」を分節音の特性から導き出すことができない以上、分節音のレベルとは独立した自律的なレ

\*2 こちらも既に拙論(三村 2014<sup>(5)</sup>: 79 注 4)にて述べたことであるが、ここで示す筆者のアクセント観は筆者が独自に構築したものではなく、上野善道の一連の論究(例えば 1980<sup>(6)</sup>, 1989<sup>(7)</sup>, 2005<sup>(8)</sup>)に代表される日本語諸方言アクセントの記述研究におけるアクセントの捉え方や、氏の理論に影響を与えたと考えられる川上夔の数々の論考(例えば 1995<sup>(9)</sup>)から多くの着想を得た結果、到達したものである。なお、前掲拙稿の「引用文献」リスト中の「川上夔(1990)」は筆者の誤記である。

ベルにおける現象として捉えられるからである。「型」の対立により知的意味の弁別がなされなくとも、歴とした「型」は存在するのである。

本稿の主題との関連で留意すべきは、筆者がここで「型」と呼ぶ「分節音のレベルとは独立した自律的な抑揚や卓立」の全てがアクセントではないという点である。アクセントの「型」は確かに語全体に被さるものではあるが、その「型」は語のある一か所に現れる本質的な特徴によって導き出すことができると考える。この点でアクセントは、例えば中国語北京方言に見られるような、語を組み立てる音節のそれぞれに音韻論的に有意義な抑揚や旋律が現れる「声調 (tone)」とは異なる性質を有する。

このアクセントが有する本質的な特徴、すなわち音韻論的に真に有意義な特徴は、例えばイントネーションなど、少なくとも語レベルでは音韻論的に指定(specify)する必要のない特徴を分離することによって初めて得られるものと考えられる。例えば、本稿が対象とするストレスアクセントではないが、上野善道(2002: 166)<sup>(10)</sup>が日本語(東京方言/標準語)のピッチアクセントを記述する上での「抽出作業」を極めて要領よく述べているため、筆者の解釈と要約(三村 2022)<sup>(11)</sup>を元にここに引用する:

(1) 「そば屋」の(直接的に観察・記録可能)音調とアクセント<sup>\*3</sup>

- a. ソ[バ]ヤ (=ソ<sup>̄</sup>バヤ) 【筆者注: ソバヤの「バ」のみが高い】
- b. ア[ノソバ]ヤニク (=ア<sup>̄</sup>ソバヤニク) 【「バ」のほか「ノ」と「ソ」も高い】
- c. ウ[マ]イソバヤガアル (=ウ<sup>̄</sup>マイソバヤガアル) 【「ソバ」は低く「ヤ」はさらに低い】

(1)は「そば屋」という語を文の様々な位置に置き、休止を入れず、またどこにも強調を置かず、全体で一息で発音したものである。(1a)では「ソバヤ」の「バ」のみが高く発音され、(1b)では「ソバヤ」の「ソ」も含めた「ソバ」が高い。(1c)では、「ウマイ」の「ウ」から「マ」にかけて音調が上昇し、「マ」の後ですぐに下降したのちそのまま「ソバ」まで続き、そこでまた下降し、そのまま進み「アル」の「ア」の後で再度下降している。(1)のデータから、いずれの「ソバヤ」においても一貫して見られる特徴は、「バ」から「ヤ」にかけて音調が下降する(ソバ]ヤ)、という点のみであり、これこそが「そば屋」のアクセントなのである(具体的に「どの高さから」下降するかは不問; 下降すること自体が一貫した特徴である)。

つまり、我々が実際の発話において直接的に観察・記録可能な現象は、実はアクセントの上にイントネーションや休止、強調等々に付随する様々な音声特徴が被さった結果生じた重層的なものであり、従って、語が単独で発音された際の抑揚や旋律を単に観察しただけではアクセントを導くことは不可能なのである。あらゆる環境や条件において抑揚や旋律を観察して分析を進め、様々な特徴を分離することによって、アクセントとして真に弁別的な属性は「抽出」されるのである。

## 2.2 言語の記述研究

前節にて私見を述べたアクセントと同様、言語研究における「記述」という用語も研究者によって様々な解釈がなされることが多々ある。そのため、本節では、筆者が「記述」という語でもっていかなる研究姿勢を示しているか、簡単に私見を述べておくこととする。

筆者が唱える記述研究とは、記述対象となる言語の全体像を、研究者自身が採取した一次資料に基づき過不足なく解明する研究姿勢を指す。広く言語一般に係る理論の構築を目的とはしていない。無論、言語学の枠組みにおいて言語の研究を行う以上、いかなる研究姿勢をとれども、言語全般にまつわる構造や体系、原理等々の解明を目標とすることは言を俟たない。筆者の考えでは、記述研究と言語全般に係る(真の意味での)普遍性の研究は決して相反するものではなく、前者を通じて蓄積された知見を礎として後者の理論構築が可能となる。従って、記述研究も、その見据える先には言語全般を対象とした理論の構築・解明が目標として存在はするものの、まずはその基盤となる個別言語の全容の解明を優先しているのである。本稿が対象とするストレスアクセントで言えば、理論研究の分野では既存のデータ

\*3 用例において使用している角括弧 ([と]) は上野が独自に用いる音調記号であり、それぞれ「音調の上がり目」と「音調の下がり目」を指す。

ベース(例えば *StressTyp2*(Goedemans et al. 2015)<sup>(11)</sup>)や先行研究に基づき論を展開するため、ストレスアクセントの判定基準などといった根本的な問題点を省みることはまずないが、翻って世界の諸言語に目を向けると、アクセントがストレスであるのか否か未だ不明な言語が多数存在することは言うに及ばず、ストレスアクセントの言語であると言われてはいるもののその全体像が未だ持って不明な言語も少なくはない。いわゆる危機言語の問題も考慮すると、個別言語のアクセントの記述研究は、むしろ喫緊の課題であると言える。

このような状況を踏まえると、研究者自身の手による一次資料の採取は言語研究においては不可欠であることは明らかである。21世紀になって久しい現在、未だ調査のなされていない言語・方言を探す方が困難ではないかと思われるが、それならば、先人たちの成果を大いに活用し広く言語全般に係る研究を進める方が効果的ではないかと考える向きも少なくない。しかし、全容の解明が著しく進んでいる言語は世界でもほんの一握りであり、筆者が対象とする北ゲルマン諸語に関して言えば、決して研究が進んでいない訳ではないものの、研究領域・分野によっては母語話者である研究者の直観に基づく研究が多数派を占め、いざ非母語話者がフィールドワーク<sup>\*4</sup>を行ってみると全く異なるデータが得られる、ということも未だ少なくはない。従って、余程研究が進み、信頼のおける資料・データが十分に蓄積された言語でない限りは、記述研究における一次資料とフィールドワークの重要性は未だ薄れることはない。

また、既に触れた通り、対象言語の姿を過不足なく明らかとすることが記述研究の目標であるが、このことは、記述研究の成果を教育に応用すれば、(理想論との誇りは免れないものの)仮に非母語話者であっても母語話者と同等の正確さ(流暢さではなく)で当該言語を運用することが可能となることを意味する。尤も、これはあくまでも一種の修辞に過ぎないが、それ程までに質と量の面で十分な成果を目指すのが記述研究であるということである。採取された資料・データの説明だけでなく、得られていないデータがなぜ存在しないのかも記述研究は明らかにしなくてはならない。

### 3 ストレスアクセントの一般特性

次節の第4節にて指摘するような問題点を残しはするものの、これまでの研究を通じてストレスアクセントにはどのような特徴が一般的に備わっているか明らかとされてきた。本節では、先行研究を通じて得られた知見を踏まえつつ、また筆者自身の研究調査の成果を交えながら、ストレスアクセントの一般的な特徴について私見を詳らかにする。

#### 3.1 ピッチアクセント

アクセントにとってどのような音声特性が可能であるかに関しては未だ十分に解明はされていないものの、少なくともアクセントの種類として「ストレス」と「ピッチ」の二種類がありうることは周知の事実と言ってよいだろう。ここでは、後述するストレスアクセントの特徴をより明確とすべく、ピッチアクセント<sup>\*5</sup>とはいかなるものであるかについて概略を示すこととする。

ピッチアクセントを持つ言語・方言の代表とえば、日本語東京方言(標準語)である。既に(1)に示

\*4 本稿ではここまで(そして、これ以降も)「フィールドワーク」と「聞き取り調査」をほぼ同義で使用してきた(使用する)。フィールドワークというと、とかく、交通の便が悪く電気も水道も完備されていないような僻地に赴き、現地の話者からデータを採取するような調査こそがフィールドワークであると考えて向きも少なくない。しかし筆者の考えでは、調査対象である言語・方言の母語話者、それも言語感覚に優れた母語話者が少なくとも1名確保できさえすれば、(社会言語学あるいは言語地理学的な調査を行わない限り)敢えて現地に赴く必要はない。アクセントや音声・音韻の研究においては、対象とする言語・方言の母語話者から一次資料を聞き出すことが目的であり、それが達成される限りにおいては、実際の聞き取り調査を行う場は不問であると考えて(日本語諸方言アクセントの記述研究で世界的にも著名な筆者の恩師も、優れたインフォーマントが見つかったという理由で、確か青森か金沢で鹿児島市方言のアクセント調査をなさったように記憶している。また、バントゥー諸語のアクセント研究で知られるもう一方の恩師も、様々なバントゥー語の話者が集まるという効率の良さを重視し、ケニアなどの大都市で敢えて調査をなさっていた)。以上から、本稿では「フィールドワーク」と「聞き取り調査」をほぼ同義に用いる。

\*5 基本周波数の変動の有無や大きさ、また変動が生み出す遷移(旋律)の型が音韻論的に有意義であるという意味においては、いわゆる声調もピッチアクセントに含めて扱って差し支えないが(cf. 早田 1999: 8-11<sup>(12)</sup>)、ここでは紙幅の都合上、また議論が煩雑になるのを回避すべく、いわゆるピッチアクセントのみを扱う。

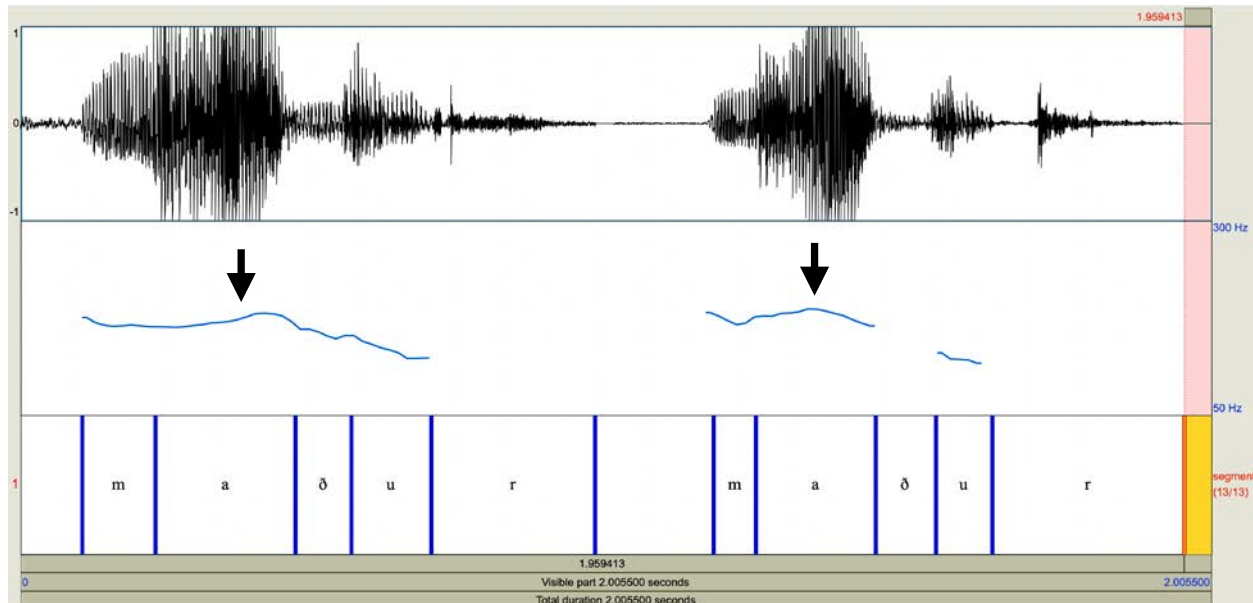


図 1: *maður* の二種類の音調 (左: 軽微な上昇調; 右: 緩やかな下降調; 矢印の箇所を参照)

した例からも明らかなように、音調の下り目、つまりは基本周波数の変動による遷移の型（旋律）が音韻論的に意味を持っている。(1)の例だけでは十分に示されていないが、例えば(2)に示す例から明らかなように、東京方言では語（厳密には「アクセント単位」）における音調の下り目の有無とその位置がアクセントとして真に有意義な特徴である：

(2) 日本語東京方言のアクセント体系(上野(2005: 241)<sup>(8)</sup>の表 7.3 と 7.4 を基に作成)<sup>\*6</sup>

キ= (気)	ハシ= (端)	オトコ= (お床)
キ] (木)	ハシ] (橋)	オトコ] (男)
	ハ]シ (箸)	オト]コ (おトコ【女性名】)
		オ]トコ (音子【女性名】)

### 3.2 ストレスアクセントの諸特徴

#### 3.2.1 音調の「向き」の指定の欠如

Cruttenden (1986: 8-14)<sup>(13)</sup>は、イントネーションの果たす役割の点から世界の言語を ‘tone languages (例: Chinese)’, ‘intonation languages (例: English【筆者の「ストレスアクセント言語」に相当】)’, ‘pitch accent languages (例: Japanese)’ の三つに分類した。この分類では、あたかも英語のようなストレスアクセント言語にはイントネーションが存在しないかのような誤解を生じさせてしまうが、Cruttenden 自身も指摘するように、ストレスアクセント言語にもイントネーションが存在することは敢えて言うまでもない。しかし、ストレスアクセント言語におけるイントネーションのような音調現象と、前節にて概観したピッチアクセントとの間の本質的な差異に関しては、意外なほど理解されていないのではないだろうか。

アイスランド語<sup>\*7</sup> から具体例を引き考察したい。現実のフィールドワークでは、同じ語を何度か発音してもらっていると次頁の(3)に示すように複数の型の音調が観察されることがある(図 1<sup>\*8</sup>も参照)：

\*6 イコール(=)の記号は上野が独自に用いる記号で、下り目がないことを積極的に示している。

\*7 アイスランド語の資料は次の話者から採取した: Auður Guðmundsdóttir 氏 (女性・1955年 Reykjavík 出身)。2013年から現在に至るまでインフォーマントとして尽力してくださっている Guðmundsdóttir 氏にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

\*8 図 1 並びに本稿で引用するピッチ曲線は、全て Praat (Boersma and Weenink 2022)<sup>(14)</sup>にて作成した。なお、参考までに音声波形やスペクトログラム(本図では省略)を参考に大まかな分節(セグメンテーション)を行ったが、厳密なものではない点に注意されたい。

(3) *maður* [má:ður **H(R)**L~FL] 「男、夫」\*9

(3)に引いた *maður* では、主強勢の置かれた音節に軽微な上昇を伴う高平調 (H(R)) と緩やかな下降調(F) の二種類の音調が表れている。ここでは音調の被さっている語が *maður* という同一の語であることが既に明らかであるため、HL(あるいはRL)やFL という音調がピッチアクセントではなくイントネーションであると容易に判断可能である。しかし、実はこれだけでは、主強勢の置かれた音節 *ma-*に現れた二種類の音調 (H と F) がピッチアクセントではないことの本質を捉えてはいない。重要な点は、**主強勢の置かれた音節 *ma-*の音調の向き** (川上泰(1973)<sup>(15)</sup>の用語) **や型(種類)が語彙レベルで音韻論的に指定(specify)されていない**、ということである。音韻論的な指定がされていないがために、H や F など種々の音調が音節 *ma-*に現れたとしても、*maður* 自体の知的意味に差異は生じず、**結果として同一の語である**と結論づけられるのである。

表面的には、ストレスアクセント言語においてもピッチアクセント言語と同様、様々な型の音調が現れうるが、型の種類や音調の動きが語彙レベルで逐一指定されているか否かが、ストレスアクセントとピッチアクセントを区別する重要な点であると言える。ある言語のアクセントがストレスアクセントであるかピッチアクセントであるかを判定する上で物理・音響学的な特性に着眼し、実験音声学的な手法を用いて判定を進める向きは決して少なくない (例: 杉藤 2012:92<sup>(16)</sup>)。しかし、本節における筆者の主張からも明らかな通り、ある言語においてアクセントがストレスであるかピッチであるかの判定の際には、具体音声それ自体に着眼するだけではなく、当該言語の音韻論における位置づけや機能をも考慮しなくてはならない。従って、実験音声学的な研究手法はアクセント解釈を裏付けることはできても、ある言語のアクセントがストレスであるか否かを判定することは不可能であると筆者は考える。

### 3.2.2 音韻的対立と音声実現の最適化

早田(1998: 35)<sup>(3)</sup>は、ストレスアクセントとピッチアクセント (早田の用語ではいわゆる声調も含む) を区別する重要な特徴として、母音音素の数を挙げる。早田によれば、「一般にストレスの有る母音音素の数は、ストレスの無い母音音素の数よりも多い(早田前掲書<sup>(3)</sup>)」。例えば、早田が例として引く言語の中からロシア語に関する箇所を引用すると、「ロシア語【原文ママ】では【中略】ストレスの有る母音音素として *aeiou* の五つが区別されるが、ストレスの無い母音音素」としては *aiu* の三つしか区別されない」という。早田の引くこのロシア語の例は極めて有名なものであるため蛇足の誇りを免れないかもしれないが、筆者の言葉で若干の補足をすれば、ここで早田が述べるストレスの有無と母音音素の数の間の相関関係は、いわゆるロシア語の力点の有無に応じて母音(字)の音価が交替する現象であると思われる (例: *окно* 「窓」(城田(1988: 5)<sup>(17)</sup>; 二つの *o* の音価の違いに注意)。

早田が指摘するような、ある任意の音節における主強勢の有無とその音節に現れうる母音音素の数との間の相関関係は、筆者が長年に渡り調査対象としてきたデンマーク語においても観察される。

(4) デンマーク語の母音音素 (三村 2021<sup>(18)</sup>)

/i, ɪ[ɪ]~[e], e, ɛ[ɛ]~[æ], a[a]~[ɑ], y, ʏ[ʏ]~[ø], ø[ø]~[œ], u, o, ɔ[ɔ], ɒ[ɒ]([ʌ]), ɐ, ə/

デンマーク語の母音音素は、(少なくとも現時点での筆者の分析・解釈によれば) (4)に挙げた 14 個を設定しうる (なお、母音の長短については後述)。(4)に示した母音音素の全てではないものの、([e]も含めて\*10) その多くが主強勢の置かれた音節と主強勢の置かれていない音節のいずれにも現れうるが、/ə/と /ɐ/は主強勢の置かれた音節には決して現れることはない(Mimura 2009: 9)<sup>(20)</sup>。

また、先に引いた早田のロシア語に関する言及を、「主強勢の置かれた音節は音韻的対立が最大限に生

\*9 音声表記中の H や L, F といった記号は各音節の音調の高さや型を概略的に示したものである (H「高平調」, L「低平調」, F「下降調」; 本稿では下記の記号も使用: M「中平調」, R「上昇調」)。なお太字の音調記号は当該音節に主強勢が置かれていることを意味する。

\*10 弱音節にも [e] が現れうるという事実から、schwa([ə])を [e] と同一の音素に還元させる解釈は成立しない(cf. Mimura 2005<sup>(19)</sup>)。

じ、またその音声実現形が最大限に表出する位置・場所である」と拡大解釈するならば、前節にてアイランド語から例を引いて考察した種々の型の音調の出現も、主強勢の置かれた音節における音声実現の最適化として捉えることが可能である。

さらに、音韻的対立ではなく音声実現形ではあるが、デンマーク語では主強勢の置かれた音節にのみ、母音の量的な区別が生じる:

(5) デンマーク語における具体音声レベルでの母音量の区別<sup>\*11</sup> (Mimura 2009: 103)<sup>(20)</sup>

- a. *fugl* [fú:l] ‘bird’ – *fuld* [fúl] ‘full, drunk’
- b. *larm* [lá:m] ‘noise’ – *lam* [lám] ‘lamb’
- c. *pæn* [p<sup>h</sup>é:n] ‘neat’ – *pen* [p<sup>h</sup>én] ‘pen’

デンマーク語では、少なくとも筆者の立場では、短母音音素と長母音音素を別個に設定する必要はなく、音節構造と音節量の制約という視点から母音量を自動的に導くことができるが(Mimura 2009: 95-105)<sup>(20)</sup>、具体音声のレベルでは、(5)に示した通り、歴とした母音の長短の差異は容易に観察できる。この差異は主強勢の置かれた音節でのみ観察可能であり、強勢を欠く音節では母音は(音学的に)常に短い。

もう一例、デンマーク語から子音連結の最適化の例を引く。デンマーク語では音節頭音(onset)と音節末音(coda)のいずれの位置にも最大で三つまで子音を連結することが可能である(例えば、厳密には単一の形態素からなる語ではないものの *springsk* 「はしゃいだ・発情した」のような例が可能である; Mimura 2009: 24-30)<sup>(20)</sup>。しかし、強勢を欠く音節では、子音連結は現れるものの、子音の数と組み合わせの種類は限られており、従って、子音連結の最適化は主強勢の置かれた音節にのみ許容される現象と言える。

以上から、当該言語における音韻的対立や音声実現形の表出が主強勢の置かれる音節において最適化されるという点も、ストレスアクセントの特徴として指摘することができる。

### 3.2.3 音節量の制約

窪菌(2002: 60-63, 82-84)<sup>(2)</sup>は英語を例にとり、主強勢’(窪菌の用語ではアクセント)が音節に置かれる際の条件や制約として、当該音節の音節量(音韻的長さ)が関与していることを指摘する。例えば、*bead* や *bid*、*bee* という一音節語は存在しても *\*bi* という一音節語は存在しない。その理由として窪菌は、短母音が一音節語に生起できないためではなく、CV という構造の一音節語が不適格であると説明する<sup>\*12</sup>。

窪菌の指摘するような主強勢の有無と当該音節の音節量との相関関係は、筆者が長年にわたり調査を行なっているデンマーク語にも観察される(PRES., PREP, ADV.はそれぞれ現在形、前置詞、副詞を指す):

(6) 文強勢の付与と音節量の増加 (三村 2009<sup>(20)</sup>: 123; 2021<sup>(18)</sup>)

a. *Jeg bor i [i] Japan.*

I live PRES. in PREP. Japan

‘I live in Japan.’

b. *Jeg har en pung med penge i [i:’].*

I have PRES. a wallet with money in ADV.

‘I have a wallet with money in.’

(6a)では前置詞 *i* 「～の」が短母音開音節であるのに対して、(6b)で文末で副詞的に用いられた場合は長

\*11 デンマーク語(の多くの方言)には、*stød* と呼ばれる声門化(laryngealization)に似た現象がある。デンマーク語学の慣習に倣い、本稿では *stød* をアポストロフィー(’)で表記している(第4.2.2節も参照)。なお、本稿で引用するデンマーク語の資料は次の話者から採取した: Evi Egholm 氏(女性・1973年 Sjælland 島の出身・Fyn 島にて生育)。2004年から現在に至るまでインフォーマントとして尽力してくださっている Egholm 氏にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

\*12 窪菌(前掲書<sup>(2)</sup>: 61)は、CV 構造の一音節語が不適格という制約からさらに一歩進み、(2モーラの長さを持つ CVV 音節や CVC 音節に対して) CV 音節が1モーラの長さしか持たず、語としては短すぎる、と説明する。紙幅の都合上、詳細は拙論(三村 2008)<sup>(21)</sup>や上野(2001)<sup>(22)</sup>に譲るが、筆者は英語(やデンマーク語)においてモーラは不要であるという立場をとるため、本文中では敢えてモーラという用語の使用は控えた。



母音開音節で現れている。デンマーク語では、英語と同様、副詞などの内容語は一般的に文強勢を担うが、前置詞などの機能語は文強勢を担うことはない。強勢を担うことのない前置詞として用いられた場合は短母音開音節で現れる語が ((6a)を参照)、文末の位置に現れて副詞的に、つまりは文強勢を担う品詞として用いられた場合には、文強勢の付与とそれに伴う音節量の増加の結果、長母音開音節で現れている ((6b)を参照)。ここから、デンマーク語においても、強勢を担う音節とその音節量の間には相関関係が存在し、強勢を担う音節は軽音節 (CV)であってはならないという制約が働いていることを読み取ることができる。

### 3.2.4 ストレスアクセントの一般特性

以上、先行研究から既に得られている知見に加え、筆者がフィールドワークを通じて採取したデータを考察した結果、ストレスアクセントには(7)に示すような一般的な特徴が存在すると現時点では結論づけることができる(議論の主題がアクセントであるため、(7)においては主強勢のみを対象としている)：

- (7) a. ストレスアクセントにおける中核的要素である主強勢が現れる音節には、高や低、下降や上昇等々、様々な高さや型(向き)の音調が現れうるが、これらの音調は語彙レベルで音韻論的に指定されている(決まっている)のではない。
- b. 主強勢の置かれる音節には当該言語において認められる音韻対立が最適化され、またその音声実現形の数も主強勢の置かれる音節において最大である。具体例は下記の通り：
  - (i) 対立する(現れうる)母音音素の数
  - (ii) 弱音節における母音音素の共起制限
  - (iii) 音調の種類・型は音韻論的に指定されていないが、実現形としては様々な音調が表出する
  - (iv) 母音量の対立はないが、長母音と短母音のいずれも実現として現れうる
  - (v) 当該言語に認められる音素配列のパターンが最大限現れうる
- c. 主強勢の置かれる音節には音節量の制約があり、短母音開音節は許容されない(\*CV)。

ストレスアクセントは、「強さアクセント」ないし「強弱アクセント」という別称ゆえに、主強勢の現れる音節における音の強度(intensity)や振幅(amplitude)と相関関係があるように考えられがちであるが(早田 1998: 34)<sup>(3)</sup>、Ladefoged (2003: 92-93)<sup>(23)</sup>の指摘するように、主強勢の置かれた音節の強度の数値はそうでない音節の数値よりも高いとは必ずしも言えない。強度や振幅よりはむしろ(7)に示した諸特徴を、ピッチアクセントにおける基本周波数のように単独ではなく、複合的に利用することで実現するアクセントがストレスアクセントなのである。

## 4 一般特性にまつわる諸問題と解決策

前節にてストレスアクセントの一般特性を導いたが、既に本稿の冒頭にて触れたように、母語話者をインフォーマントとする聞き取り調査の際には、一般特性に反すると思われる事例に出くわすことは稀ではない。果たして一般特性自体に誤りがあるのか、あるいは何らかの事情により一般特性に例外が生じたのか、等々、実際のフィールドワークの場面ではその都度判断を迫られることになる。本節では、筆者のこれまでのフィールドワークで得られたストレスアクセントの一般特性にまつわる具体的な問題点を取り上げ、その背後にあると考えられる要因や、調査の場面での対応策、解釈の方法について考察していく。

### 4.1 音調や音節量が聞き取りの手掛かりとならない時

既に前節にて議論した通り、ストレスアクセントを特徴づける要素として、(主)強勢の置かれた音節の長さ(重さ)や音調を挙げることができる。これは逆の見方をすれば、実際の聞き取り調査の場面で強勢の型、すなわち語における主強勢の位置を特定する上で、当該音節はもちろんのこと、語を構成する各音節の音節量や音調の型が有効な手掛かりになりうるということを意味するが、現実には一筋縄では

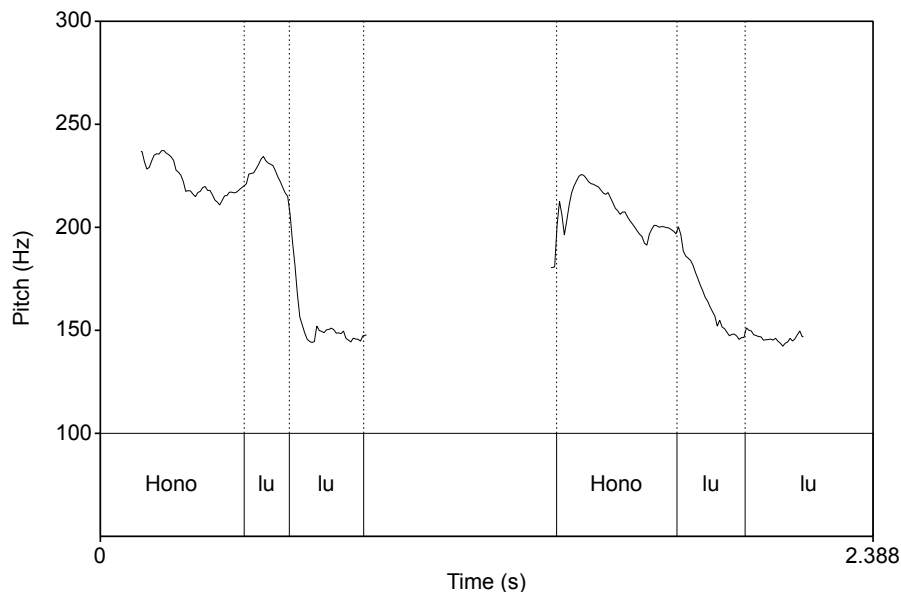


図 2: Honolulu のピッチ曲線

いかず、逆に誤った結論を導く契機にもなりうる。ここでは、筆者が 10 年弱に渡りアクセント調査を進めているアイスランドから例を引き、具体的な問題点と筆者なりの対応策について考察したい。

アイスランド語は左端の音節に主強勢の置かれる、いわゆる「一型ストレスアクセント体系」の言語である(三村 2021<sup>(24)</sup>: 87; 2021<sup>(25)</sup>: 80-81)。語の品詞や音節数、語種、語構造の別(複合か否か、複合語の内部構造・枝分かれ構造の別)を問わず、原則的に第一音節に主強勢が置かれるが(具体例は前掲拙論<sup>(25)</sup>の p.81 を参照されたい)、外来語では例外的に第二音節以降の音節に主強勢の置かれる語もわずかではあるが確認されている(同じく具体例は前掲拙論<sup>(25)</sup>の p.90 を参照のこと)。

例外的な振る舞いを示す外来語の性質(借用元の言語、音節数、音節構造、等々)は何かを明らかとすべく、2015 年以降、年に数回の頻度で筆者は外来語アクセントの聞き取り調査を行ってきた。ストレスアクセントの聞き取りというと、「強くはっきりと」聞こえる音節を一箇所特定すれば良い、と楽観する向きが殆どであろうが、実際はそれほど容易くはない。アイスランド語(のみならず一般的にゲルマン諸語)では外来語のほとんどは二音節以上の多音節語で、例えば *KENgúra*<sup>\*13</sup>「カンガルー」や *MARsipan*「マジパン【食品】」のように、語を構成する音節の音節量が一つでも異なれば(例:*MAR.sí.pan* 重・軽・重音節)、主強勢の位置の特定はそれほど困難ではないものの、同一構造の音節が連続する(と綴りの上では推定される)語、例えば *Fukushima*「福島【地名】」、*Honolulu*「ホノルル」、*ukulele*「ウクレレ」(以上、開音節の連続)、*Hong Kong*「香港」、*bensín*「ガソリン」(閉音節の連続)の場合は、どこに主強勢が置かれているかを特定するのは容易ではない。

また、インフォーマントにとってその外来語がどれくらい馴染みのあるものであるかの度合いに起因するものと思われるが、全ての音節がほぼ均一のテンポや長さで発音されることも稀ではなく、さらに多音節語ゆえにリズムも生じ、聴覚的に卓立した音節が果たして主強勢の所在により卓立して聞こえるのか、あるいはリズムの拍によるものなのか、判別は難しい。特にリズムの拍により卓立していると思しき音節にもやや高め音調や下降調が現れうるため、音調が聞き取りの手掛かりにならないどころか、誤って主強勢の位置を聞き取ってしまうことすら起こりうる(図 2 の *Honolulu* のピッチ曲線も参照されたい; 図左のピッチ曲線では第三音節 *-lu-* がやや高く現れているため、主強勢が *Ho-* に置かれているのか

\*13 本文中では煩雑になるのを防ぐべく音声表記を割愛するが、その場合は、代替策として語例を大文字書き(例: *KEN-*)することで、当該音節に主強勢が所在することを示す。なお、アイスランド語の正書法では一部の母音字に *accent aigu* を付すことがあるが、強勢の所在とは無関係である点にくれぐれも留意されたい。

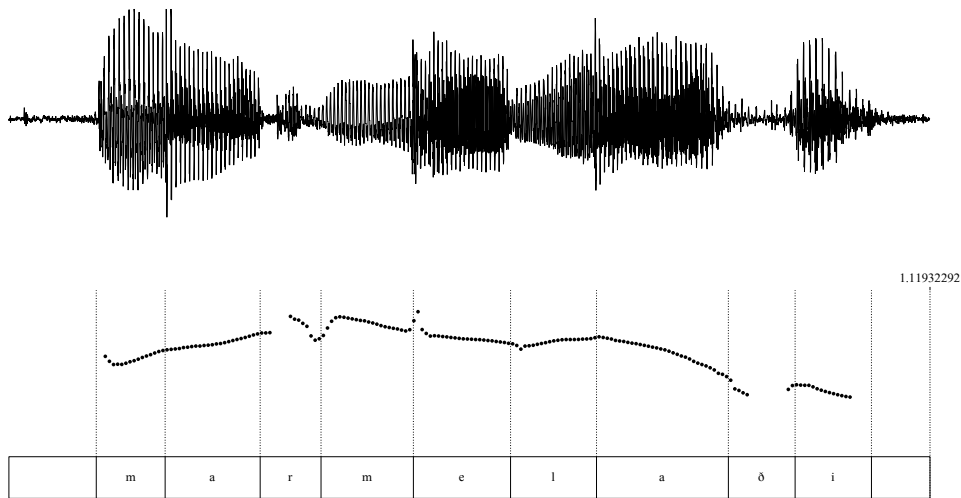


図 3: *marmelaði* の音声波形とピッチ曲線  
(第三音節-la-の下降調のため *marmeLAði* のように聞こえる)

-*lu*-に置かれているのか判別しづらい; 図右の場合は基本周波数の遷移から *Ho*-に主強勢が置かれているように判断可能だが、第三音節-*lu*-に下降調が現れ、それに伴い持続時間も(長母音として表記可能なほど)やや長いため、*Ho*-に主強勢が置かれていると即断し難い)。特に筆者のインフォーマントは日本の小・中学校に相当する教育機関でアイスランド語とデンマーク語の教師として教鞭を執るためか、囁んで含めるようなゆったりとしたテンポの発音になることが多く、語を構成する音節の長さが均一になりやすく、音調を手掛かりに主強勢の位置を特定することも難しい。

このような事態を回避すべく、筆者は調査項目の読み上げを依頼する際、度々「早口で」との要望を出すものの、調査者が求める「早口」と一般の話者が認識する「早口」とでは指す概念が異なるのであろうか、結果としてはテンポの速い発話というよりは、単に口先だけでぞんざいに発音したような読み上げになってしまうことが多い。そこで筆者は、度重なる思案の結果、次の三つの手法を組み合わせた補助的な方法を併用することで語全体にかかる音調や抑揚の型をコントロールし、なるべく自然なテンポの発話を採取している: (1) パソコンのプレゼンテーションソフト等を用いて読み上げの間隔を一定に調整する; (2) キャリア文の特に文末の位置に語を置くことで語全体にかかる音調や抑揚の型を一定にする、(3) 複合語の後部要素に組み込むことで採取したい語(目標語 **target word**)にかかる音調や抑揚の型をなるべく一定にする。以下、それぞれの手法について詳しく述べていくこととする。

まず一つ目のプレゼンテーションソフトを用いた発話テンポのコントロールから始める。これは具体的には、プレゼンテーションソフトで目標語を一つずつ記載したスライドを作成し、各スライドが自動的に切り替わる間隔(秒数)を一定にするというものである。実際の調査では、まず調査票を用いた読み上げ・聞き取り調査を先に行い、調査ノートへの記録は済ませてある。読み上げ調査の際には、発音や語義の確認等のために何度も発音し直してもらうことになるが、そこでは目標語は様々なテンポで発音されることになる。一通り読み上げ・聞き取り調査が終わった後、ノートパソコン(やタブレット端末)上でスライドを使用した読み上げ調査を行う(実際の調査では少なくとも3回は行う;1回目は練習という位置づけ)。スライドが切り替わり次々と目標語が提示されることで、一つの語に費やす時間を短縮させ、可能な限り自然なテンポでの発話を引き出すことが可能となる。

但し、スライドを用いて発話テンポをコントロールすることで、一連の目標語の読み上げに一種のリズムを生じさせてしまい、また直前の語の影響を受けることで、その語本来の強勢型とは異なる型で読み上げられてしまう危険性もある。そのような問題点を解消すべく、筆者はキャリア文や複合語を使用

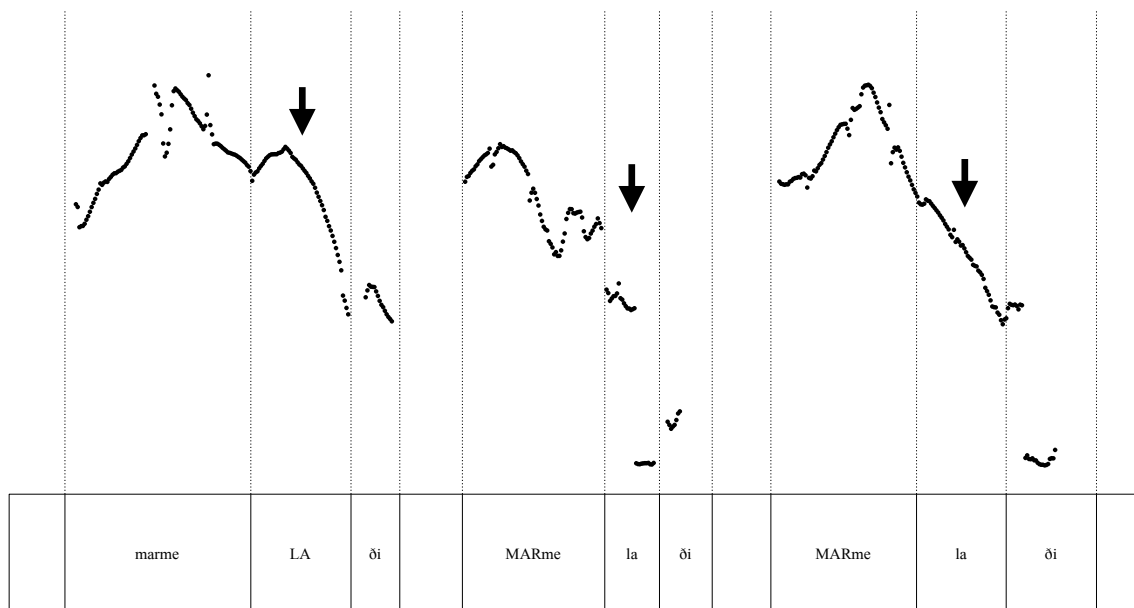


図 4: *marmelaði* のピッチ曲線 (左から単独形・キャリア文・複合語の順)

した読み上げ調査も併用している。

具体例として *marmelaði* 「マーマレード」という語を取り上げて説明する。調査票の読み上げ・聞き取り調査を行った当初は、筆者には *MARmelaði* と *marmeLAði* (-LA-は長母音開音節) の二つの型で揺れているように思われた (前頁の図 3 も参照のこと)。話者に馴染みのない外来語であれば、複数のアクセント型の間で発音が揺れるということは決して珍しくはないものの、*marmelaði* は語源的には外来語ではあるものの、むしろアイスランド語には定着していると言っても過言ではない語であるため、話者の中で複数の強勢型が揺れるというのは考えにくい。他の可能性としては、*marmelaði* がデンマーク語を經由して取り入れられた外来語であり (Magnússon 1989<sup>(26)</sup>: 606)、筆者のインフォーマントがデンマーク語の運用能力を有する<sup>\*14</sup> がために、デンマーク語の *marmeLAde* と同じ型の強勢型で発音したとも考えられる。

では、*MARmelaði* と *marmeLAði* のどちらがアイスランド語として「正しい」アクセントなのか。この判定をすべく、筆者は、*marmelaði* を文末の位置に置いたキャリア文や *marmelaði* を後部要素とする複合語の読み上げ・聞き取り調査を行う。実際に調査に用いた具体例を(8)に示す:

(8) キャリア文と複合語の具体例

a. (i) *Sagðir-ðu marmelaði?* 「*marmelaði* って言ったんですか？」  
said-you marmalade

(ii) *Já ég sagði marmelaði.* 「ええ、*marmelaði* と言ったんです。」  
yes I said marmalade

b. *jarðarberjamarmelaði* 「莓ジャム」

< *jarðarber* 「莓」 + *marmelaði* 「マーマレード、ジャム」  
(cf. *jarðarber* < *jörð* 「土地」 + *ber* 「ベリー」)

目標語をキャリア文の末尾に置くことの利点は、文の一部に組み込むことで目標語が単独で発話された際に生じるリズムによる卓立を可能な限り抑え、また文のイントネーションを目標語に被せることで

\*14 アイスランドでは、1999 年まで日本の小・中・高等学校に相当する教育機関においてデンマーク語が第一外国語として学習されていたため、出生年代や受けた教育によっては、デンマーク語の高い運用能力を有するアイスランド人も少なくはない。

単独で発話された際に現れる音調の動きの幅を小さくすることが可能となる点にある。キャリア文に組み込まれた発話を数回観察することで、目標語において一貫して現れる卓立、つまりは主強勢の位置を特定することが可能となる。目標語を複合語の後部要素に組み込む利点も同様である(前頁の図4も参照のこと; 図左の単独形で表れている第三音節-*la-*の下降調(矢印の箇所を参照)が、図中央のキャリア文内での発話や図右の複合語内部での発話では抑えられている一方(同じく矢印の箇所を参照)、第一音節 *mar-*の音調の高さは維持されている点に注意)。

## 4.2 複数種類のアクセントの共存という誤謬

言語によっては、ストレスアクセント言語であると推定されながらも、主強勢を担う音節に知的意味の弁別に寄与する音調など語彙レベルでの音韻論的な指定が必要な韻律特徴が現れるものもある。フィールドワークにおける聞き取りの困難さもさることながら、どのように音韻解釈するかが重要な問題となる。以下、筆者が実際に調査をしたノルウェー語とデンマーク語を例にとり、具体的な問題点や解決策について考察していきたい。

### 4.2.1 音調の向きが有意義なストレスアクセント

既に述べたとおり、ストレスアクセントの言語であっても主強勢の置かれた音節には様々な型の音調が現れうるが、これらの音調は音韻論的に指定されたものではなかった。しかしながら、筆者がこれまで調査した言語の中には、ストレスアクセント言語であると推定されながらも主強勢を担う音節の音調の種類が弁別的、すなわち語彙レベルで音韻論的に指定しなければならないものもある。本節では、ノルウェー語南西部方言(Sandnes/サンネス方言)から具体例を引き、ストレスアクセントの判定基準や音調の解釈について論じていく。まず(4)を参照されたい:

(9) ノルウェー語南西部方言(Sandnes 方言<sup>\*15</sup>; 三村(2014: 80)<sup>(5)</sup>の表記等を一部変更)

a. *leser* [lé:r.sə HL] 「読む(現在形)」- *lese* [lé:r.sa FL] 「読む(不定形)」

b. *avtale* [á:v.t<sup>h</sup>à:là HML] 「約束する」- *avtale* [á:v.t<sup>h</sup>à:là FML] 「約束」

(9a)と(9b)のいずれペアにも主強勢を担う音節に H(高平調)と F(下降調)の二種類の音調が表れており、いわゆる知的意味の弁別がなされている。この意味においては、Sandnes 方言のアクセントをピッチアクセント(の一種)と分析することも不可能ではないものの、以下に述べるような特性を有するがゆえに、Sandnes 方言はストレスアクセントの言語であると推定するのが妥当である。

第一に Sandnes 方言には音節量の制約が存在する。筆者の調査した限りにおいては、文レベルでリズムの拍を担いうる語(内容語 *content words*)、換言すれば単独で主強勢を担いうる一音節語で、CV 音節の話は一例も得られていない。また、後述する主強勢と音調との依存関係を論ずる際に引く(10)の例からも主強勢の有無と音節量の相関関係は読み取れる。例えば、単独ではアクセントを担い得ない機能語(*function words*)である *henne* 「彼女を」が、談話レベルでのフォーカス(強調)が置かれて文アクセント(リズムの拍)を担うことに伴い、短母音開音節構造から長母音開音節構造へと音節量が増加している。

さらに Sandnes 方言には、主強勢の置かれた音節における音韻対立や音声実現形の最適化<sup>\*16</sup>(第 3.2.2 節を参照)も観察される。例えば、Sandnes 方言に認められる音節頭音並びに末尾における子音連結の型は、(逆説的に聞こえる嫌いはあるが)主強勢の置かれた音節では全て現れる一方、強勢を欠く音節ではごく一部の組み合わせしか現れ得ない。また、詳細な議論は稿を改めるが、Sandnes 方言は音節構造や音節量の制約から母音量を規則で導くことが可能であると筆者は考えており、従って、母音音素は量的な長短の)対立は示さないと解釈するが、母音の音声実現形としては長短いずれの長さも観察される。重

\*15 ノルウェー語 Sandnes 方言の資料は次の話者から採取した: Brede Tingvik Haave 氏(男性・1988年 Sandnes 出身)。2009年11月から2012年9月までの長きに渡り、ほぼ毎週、インフォーマントとして筆者の調査に貴重な時間を割いて協力して下さった Tingvik Haave 氏にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げる。

\*16 ここで述べる「最適化」は拙論(三村 2014<sup>(5)</sup>: 82)において「体系的優位性」と呼ぶ概念に相当する。本稿では早田(1998)<sup>(3)</sup>の知見を踏まえて「最適化」という用語を新たに導入したが、二つの用語が表す概念は本質的に同じである点に留意されたい。

要な点は、音声レベルでの母音の長短の区別は強勢の置かれた音節でのみ観察され、弱音節では短母音しか現れ得ないということである。

以上から、Sandnes 方言のアクセントをストレスアクセントであると推定することは極めて蓋然性が高い。では、主強勢の置かれた音節に現れる二種類の音調はどう位置付けるべきか。主強勢の置かれた音節に音韻論的に有意義な複数種類の音調が現れる現象は Sandnes 方言に限られたことではなく、他のノルウェー語の方言やスウェーデン語諸方言、デンマーク語の一部の方言にも観察される。これら諸言語・諸方言の研究の歴史は長いものの、一つの言語・方言の音韻論の中でストレスアクセントと音韻論的に有意義な音調をいかにして統一的に位置付けるかについて明言した研究は、(拙論(三村 2014<sup>(5)</sup>), 三村 2022<sup>(27)</sup>)を除いては)寡聞にして未だ耳にしたことがない。また、安易にストレスアクセントとピッチアクセントが同一言語内に共存しているという解釈もありうるが、管見に及ぶ限りではこのような論究は未だ目にしたことがなく、言語記述の経済性(economy)の点からも決して好ましい解釈とは言えない。

このような背景に鑑みて、筆者は、Sandnes 方言をはじめとするいわゆる「ピッチアクセント」を持つとされる方言のアクセントを、音調の型が音韻論的に有意義な二種類の主強勢を持つストレスアクセントと捉えてきた。論拠としては、例えば Sandnes 方言においては、強勢と音調が音韻論的に同一の資格を有しているのではなく、一種の依存関係にあることが挙げられる。(10)に論拠を示す(便宜的に標準語の正書法を使用して例文を提示する; なお、大文字書きの箇所は強勢の所在を示す):

(10) 主強勢と音調の間の依存関係(三村 2014<sup>(5)</sup>: 82-83; NOM.と OBJ.はそれぞれ主格と目的格)

a. *Jeg liker henne.* 「私は彼女が好きです。」

I NOM. like PRES. she OBJ.

[eg M <sup>2</sup>li:gə FM hɥ L]

b. (*Hvem liker du?* 「君は誰のことが好きなの?」に対する答えとして)

*Jeg liker HENne.* 「(僕は) 彼女のことが好きなんだよ。」

I NOM. like PRES. she OBJ.

[eg M li(:)gə MM <sup>1</sup>hú: H~F]

c. (*Han liker henne ikke, . . .* 「彼は彼女が好きじゃない(けど)、. . .」に続く発話として)

(men) *JEG liker henne.* 「(でも,) 僕は(彼女が) 好きなんだよ。」

(but) I NOM. like PRES. she OBJ.

[(men) <sup>1</sup>é:g H~R li(:)g(ə) M(M) (h)ɥ L]

(10a)の文は特にどこにも強調を置かずニュートラルなリズムで読み上げられた文で、文を構成する三つの語の内、動詞である *liker* がリズムの拍を担っている。一方、(10b)に示した文は、形態統語論的には(10a)の文と同一の構造を有してはいるが、談話において先行する疑問文 *Hvem liker du?*との繋がりから人称代名詞 *henne* にフォーカスが置かれ、その結果、動詞 *liker* の有する強勢が消失するとともに、同じく本来有していた音調(F)も消失している(FがMと交替している)。また、(10c)の文は、(10b)の文とフォーカスの置き方は異なるものの、同様に動詞 *liker* の強勢が失われており、それに付随して本来の音調(F)も失われている。このような強勢の有無と音調の消失は、強勢と音調が Sandnes 方言の音韻論において対等の位置づけがなされていると仮定しては説明のできない現象であり、音調の存在が当該音節における強勢の所在を前提とする、いわば音調が強勢に従属した関係を想定しなくては説明ができない。

以上の議論から、Sandnes 方言のアクセントはあくまでもストレスが基盤であり、音調の種類<sup>\*17</sup>が異なる二種類の主強勢を持つストレスアクセント体系であると結論づけることができる。

\*17 紙幅の都合上、詳細は拙論(三村 2014<sup>(5)</sup>)に譲るが、厳密には音調の「種類」ではなく「有無」である。

#### 4.2.2 声門化の有無が有意義なストレスアクセント

前節にて考察したノルウェー語 Sandnes 方言に類する事例としてデンマーク語(地域共通方言)を挙げることができる。既述の通りデンマーク語にもノルウェー語諸方言と同様に弁別的な音調を持つ変種もあるが、筆者が長年に渡り調査を続けているデンマーク語は声門化(laryngealization, creaky phonation; デンマーク語学の慣例では *stød* と呼ぶ)の有無が音韻論的に有意義である。

*Stød* という語自体は英語の ‘thrust’ に相当する意味の語で、そこから窺い知ることができる通り、聴覚的には声門閉鎖音に酷似しており、語を発音する際に一種の「つまづき」や「突っかかり」があるような印象を与えるものの、実際には声門の完全な閉鎖はむしろ稀である(*stød* の生理・音響音声学的な側面については Fischer-Jørgensen (1989)<sup>(28)</sup>や Smith (1944)<sup>(29)</sup>が詳しい)。

*Stød* は、(論を先取りする形となるが)強勢を伴う音節(CV 構造以外の音節)の韻律部(rhyme)に現れる。(11)に示す通り、単母音閉音節構造の場合、末尾子音(coda)には制約があり、阻害音(obstruents)には *stød* は現れない(デンマーク語学の慣例に倣いアポストロフで *stød* を表記する):

(11) *stød* の現れうる音節構造\*<sup>18</sup>

a. V:(C) ⇒ 長母音の伸ばし部分に顕著に *stød* が現れる

e.g. *bi* [bí:] ‘蜂’, *fugl* [fú:] ‘鳥’

b. VR(C) (R は /ð, j, l, w, m, n, ŋ, r/) ⇒ R に顕著に *stød* が現れる

e.g. *fuld* [fúl:] ‘酔っ払った’, *angst* [áŋ:] ‘恐怖’

上記の構造を満たす音節全てに *stød* が現れるわけではなく、従って、(単一の形態素からなる具体例は著しく乏しいものの) *stød* の有無で知的意味の弁別がなされる最小対も存在する:

(12) *stød* の有無で対立する最小対(三村 2018<sup>(30)</sup>: 21)

a. *haj* [há:] ‘鮫’ — *hej* [há] ‘はじめまして’

b. *hund* [hún:] ‘犬’ — *hun* [hún] ‘彼女は/が’

ここまで概観してきたデンマーク語の *stød* も、前節にて論じた Sandnes 方言の音調と同様、ストレスアクセントの一変種として解釈することが妥当であり、その論拠も Sandnes 方言の音調と同様、強勢ととの間の依存関係である。論拠として複合語を例に引く:

(13) 強勢と *stød* の依存関係(三村 2021<sup>(18)</sup>)

a. *sygehusbibliotek* [sý:̥.y.hus.bi.bli.o.tʰɛ̥:kʰ] ‘hospital library’

(< *sygehus* [sý:̥.y.hù:’s] ‘hospital’ + *bibliotek* [bi.bli.o.tʰɛ̥:kʰ] ‘library’)

cf. *sygehus* (< *syge* [sý:̥.y] ‘disease’ + *hus* [hú:’s] ‘house’)

b. *sygehusvæsen* [sý:̥.y.hus.vè:’sæn] ‘hospital service’

(< *sygehus* + *væsen* [vè:’sæn] ‘service’)

(13a)と(13b)はいずれも三要素からなる複合語である。(13a)は前部要素 *sygehus* (*syge* と *hus* から成る)が既に複合語であり(*syge* と *hus* から成る)、そこに後部要素 *bibliotek* を付加したものである。注目すべき点は、*sygehus* がさらに大きな複合語である *sygehusbibliotek* の前部要素となる際に *sygehus* の後部要素-*hus* が本来有していた(副次)強勢が新たな後部要素-*bibliotek* に移り、結果として-*hus*-が弱音節となっている点である。強勢の消失に伴い-*hus*-は本来有していた *stød* も失っているが、これは *stød* の出現が当該音節における強勢の所在を前提としていることを表している(次頁の図5も参照のこと)。

以上から、デンマーク語のアクセントもストレスを基盤とし、声門化の有無で異なる二種類の主強勢を持つストレスアクセント体系であると結論づけることができる。

\*18 (11b)の R は鳴音(resonant/resonant)の意; 音素表記中の/R/は筆者の設定した接近音音素で、二重母音の音節副音(後半部分)として実現するものを指す(Mimura 2009<sup>(20)</sup>を参照)。

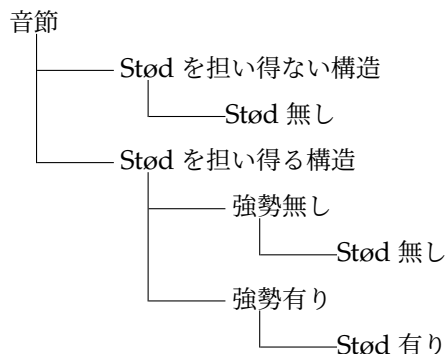


図 5: 強勢と stød の間の依存・階層関係

## 5 結語

### 5.1 まとめ

以上、本稿では、ストレスアクセントの定義や判定基準といった理論的な側面とフィールドワークにおける聞き取りの問題といった実践的な側面について、先行研究から得られた知見と筆者のこれまで行ってきたフィールドワークの成果や経験に基づき考察した。

なお、ストレスアクセントの理論的な問題点としては、ストレスの段階・程度（音韻論的な意味での強勢を何段階設定しうるか）や主強勢の位置を規則で導きうるかといった点も議論に値するが、既に私見を公にしているため（三村 2003<sup>(31)</sup>; 2008<sup>(32)</sup>）、また紙幅の都合から、本稿では割愛した。

### 5.2 ストレスアクセントの可能性と多様性: 今後の課題に代えて

既に第 2.2 節にて触れたように、ストレスアクセントの類型論的研究は著しい発展を見せてはいるものの、そこで引き合いに出されている言語のアクセントの全容は未だ不明なものも多く、果たして真にストレスアクセントであると考えて良いか否かという事例も少なくはない。本稿ではノルウェー語やデンマーク語の考察を通じて音調の型や声門化の有無が有意義なストレスアクセントを提唱したが、その他にも様々な韻律的特徴を兼ね備えたストレスアクセントを持つ言語が存在しても決して不思議ではない。今後、様々な言語のアクセントの記述研究がより深く進められることが望まれる。

最後に本節では、今後の課題の一つとして、未だフィールドワークを行うには至っていないものの、北ゲルマン諸語のアクセント史との関連から、ここ数年筆者が高い学術的関心を寄せているエストニア語<sup>\*19</sup>を取り上げて、ストレスアクセントの可能性や多様性について考察したい。

エストニア語は音韻論の研究はむしろ進んでいる部類に入るものの、アクセントに関してはストレスであるか否かは明確ではない。エストニア語の音韻論 (Tauli 1956<sup>(34)</sup>) や韻律現象 (Kuznetsova 2019<sup>(35)</sup>)、伝統的な口承歌謡における韻律を扱った研究 (Ross and Lehiste 2001<sup>(36)</sup>) では、stress や stressed / unstressed syllable といった語が用いられており、エストニア語のアクセントがストレスであることをうかがわせる。その一方で、エストニア語は、次頁の(14)に示すように母音量のほか子音量も音韻論的に有意義であると言われている (語例の英語訳は Kuznetsova 2019<sup>(35)</sup> と Fox 2000<sup>(37)</sup> に依る; 音声表記は松村・宮野 2012<sup>(38)</sup> の付属 CD の音声を筆者が表記したもの):

\*19 エストニア語と同じくウラル語族のフィン・ウゴル語派、バルト・フィン諸語に属するリーブ語 (リヴォニア語, Livonian; 長らく消滅の危機に瀕する言語として位置付けられてきたが、2013 年 6 月に最後の話者が他界) にはデンマーク語における stød に近似する韻律現象があると報告されており (Kiparsky 1995/2018<sup>(33)</sup>)、また本文にて後述する通り、筆者の観察ではエストニア語にも声門化に似た現象が観察されるため、北ゲルマン諸語のアクセント史研究の観点から筆者は近年、エストニア語に学術的な関心を持っている。



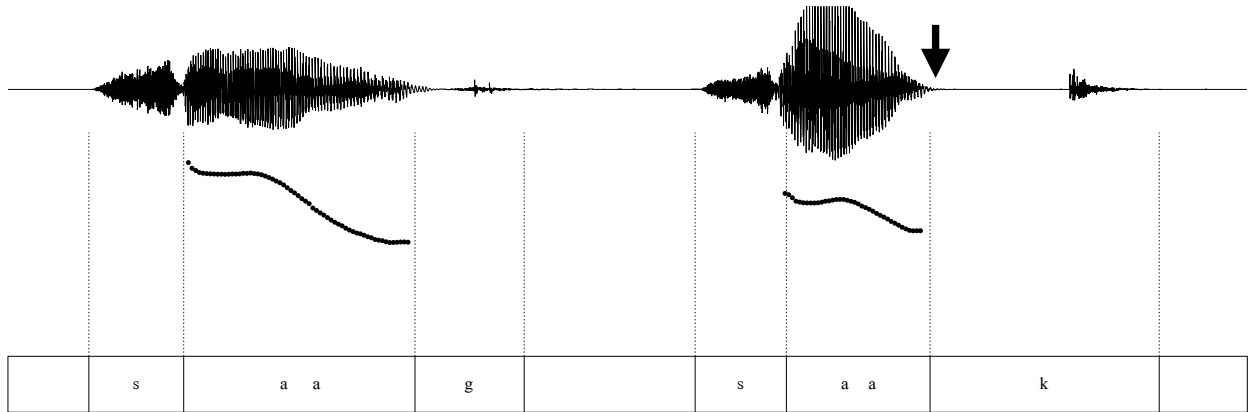


図 6: *saag* と *saak* の音声波形とピッチ曲線

(14) エストニア語における母音量と子音量の対立例

a. *sada* [sáda] ‘100’ – *saada* [sá:da] ‘send’

b. *saag* [sá:g] ‘saw’ – *saak* [sá:g̊g̊] ([sá:ʔg̊]) ‘yield, harvest’

本研究で導いたストレスアクセントの一般特性が正しいとすれば、母音の長さ（母音量）が音韻論的に有意義である（知的意味の弁別に寄与する）ことは例外的である。現に、(14b)の語例の音声波形とピッチ曲線を示した図6から読み取れるように、同じく長母音（母音連続と解釈か?）と表記される箇所持続時間は著しく異なり、従って、エストニア語における母音量の対立は、例えば日本語における「おじさん」と「おじいさん」の対立におけるものとは異質なものかもしれない。この意味ではエストニア語がストレスアクセント言語である可能性は未だに残されている。

また、(14b)から明らかなように、エストニア語には子音量も音韻論的に有意義であると考えられているものの、録音資料に基づく筆者の観察では、*saak* の長母音（母音連続?）から後続する子音連続にかけて聴覚的に声門閉鎖音や声門化に似た音声を観察することができ（図6の矢印の箇所）、単純な重子音とは異なるように思われる。音声波形の精査を通じて声門化の有無等を明らかとする必要があるが、エストニア語は、日本語におけるような意味での母音や子音の単純な（換言すれば、離散的な単位である母音あるいは子音音素を二倍する形での）量的対立を示す言語ではなく、もっと複雑な形で母音や子音が量的対立を示すストレスアクセント言語である可能性は残されている。今後の詳細な記述研究調査が期待される。

## 謝辞

\*本小論の内容の一部は、北海道言語研究会主催の第22回研究例会(2022年3月28日、室蘭工業大学)における筆者の口頭発表(三村 2022)<sup>(1)</sup>に基づいている。同口頭発表の際に貴重なコメントを下された聴衆諸氏にこの場をお借りしてお礼を申し上げる。また、本稿に対して貴重なコメントや助言を下された匿名査読者の方々にも併せてお礼を申し上げたい。なお、前述の口頭発表や本稿において引用する資料・データの採取は、全て JSPS 科研費の助成を受けて行った(課題番号: 15K16729, 20K00594)。

## 文献

【慣例に倣えばアイスランド人の名前は「ファーストネーム ミドルネーム ラストネーム」と記すべきだが、本稿ではその他の欧米の著者名と同様、「ラストネーム, ファーストネーム ミドルネーム」の順に記した】

- (1) 三村竜之, アクセント研究諸概念管見, 北海道言語研究会第22回研究例会, 2022.
- (2) 窪菌晴夫, 音節とモーラの機能, 窪菌晴夫、本間猛編, 音節とモーラ, 東京: 研究社, 2002, p1-96
- (3) 早田輝洋, 「アクセント」早わかり, 月刊言語 Vol. 7, No. 3, 東京: 大修館書店, 1998, p32-39
- (4) Gordon, Matthew K. and van der Hulst, Harry, Word-stress systems, Eds., Carlos Gussenhoven, Aoju Chen, The Oxford Handbook of Language Prosody, Oxford: Oxford University Press, 2020, p66-77.
- (5) 三村竜之, ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言における音調のアクセント論的解釈, 室蘭工業大学紀要, 第63号, 2014, p77-91
- (6) 上野善道, アクセントの構造, 柴田武編, 講座言語学第1巻 言語の構造, 東京: 大修館書店, 1980, p87-134
- (7) 上野善道, 日本語のアクセント, 杉藤美代子編, 講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻(上), 東京: 明治書院, 1989, p256-300
- (8) 上野善道, 音の構造, 風間喜代三, 上野善道, 松村一登, 町田健, 言語学第2版, 東京: 東京大学出版会, 2005, p256-300
- (9) 川上泰, 日本語アクセント論集, 東京: 汲古書院, 1995.
- (10) 上野善道, アクセント記述の方法, 飛田良文, 佐藤武義編, 現代日本語講座第3巻 発音, 東京: 明治書院, 2002, p163-186
- (11) Goedemans, Rob, Heinz, Jeffrey, and van der Hulst, Harry, StressTyp2, 2015, <http://st2.ullet.net>
- (12) 早田輝洋, 音調のタイポロジー, 東京: 大修館書店, 1999.
- (13) Cruttenden, Allan, Intonation, Cambridge: Cambridge University Press, 1986.
- (14) Boersma, Paul, Weenink, David, Praat: doing phonetics by computer, Version 6.2.14, 2022, [www.praat.org](http://www.praat.org). 【2022年6月1日アクセス】
- (15) 川上泰, 日本語アクセント法, 東京: 学書房, 1973.
- (16) 杉藤美代子, 日本語のアクセント、英語のアクセント: どこがどう違うのか, 東京: ひつじ書房, 2012.
- (17) 城田俊, ロシア語発音の基礎, 東京: 研究社, 1988.
- (18) 三村竜之, デンマーク語 Stød 研究の諸問題: 通時論と共時論の両側面から最善の音韻解釈を探る, 国立国語研究所プロジェクト共同研究「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第7回オンライン研究発表会(2021年6月4日), 2021.
- (19) Mimura, Tatsuyuki, Phonology of Danish Schwa: with special reference to stød-sandhi, 東京大学言語学論集 24, 2005, p141-157
- (20) Mimura, Tatsuyuki, Issues in Danish Word-prosody: A Synchronic Description, 未刊行博士学位請求論文: 東京大学大学院人文社会系研究科, 2009.
- (21) 三村竜之, デンマーク語モーラ説の批判的考察, 東京大学言語学論集 27, 2008, p147-161
- (22) 上野善道, 日本語のモーラ、ラテン語のモーラ、英語のモーラ, 国語研究 64, 2001, p8-16
- (23) Ladefoged, Peter, Phonetic Data Analysis: An Introduction to Fieldwork and Instrumental Techniques, Oxford: Blackwell, 2003.
- (24) 三村竜之, アイスランド語アクセント史の構築に向けて, 音韻研究 24, 東京: 開拓社, 2021, p87-88
- (25) 三村竜之, アイスランド語ストレスアクセントの史的研究: 文献資料とフィールドワークに基づく試論, 北海道言語文化研究 19, 2021, p77-94
- (26) Magnússon, Ásgeir Blöndal, Íslensk orðsifjabók, Reykjavík: Orðabók Háskólans, 1989.
- (27) 三村竜之, ノルウェー語南東部方言のアクセントの再検討: アクセント論の視点から, 北海道言語文化研究 20, 2022, p61-89
- (28) Fischer-Jørgensen, Eli, Phonetic analysis of the stød in standard Danish, *Phonetica* 46, 1989, p1-59.

- (29) Smith, Svend, *Stødet i dansk rigssprog: en eksperimentalfonetisk studie*, København: Kaifers Boghandel, 1944.
- (30) 三村竜之, *ニューエクスプレスプラスデンマーク語*, 東京: 白水社, 2018
- (31) Mimura, Tatsuyuki, *Stress accent in Danish*, 東京大学言語学論集 22, 2003, p259-291.
- (32) Mimura, Tatsuyuki, *Prosodic compounds and the interpretation of secondary stress in Danish*, 音韻研究 11, 東京: 開拓社, 2008, p55-62.
- (33) Kiparsky, Paul, *Livonian stød*, The TREND phonology workshop, University of California, Santa Cruz, 1995 [Rev. Kiparsky, Paul, *Livonian stød*, Eds., Wolfgang Kehrein, Björn Köhnllein, Paul Boersma, Marc van Oostendorp, *Segmental Structure and Tone*, Berlin/Boston: Walter de Gruyter, 2018, p193-209.]
- (34) Tauli, Valter, *Phonological Tendencies in Estonian*, Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab, *Historisk-filologiske Meddelelser*, bind 36, nr. 1, København, Ejner Munksgaard, 1956.
- (35) Kuznetsova, Natalia, *What Danish and Estonian can show to a modern word-prosodic typology*, Eds., Rob Goedemans, Jeffery Heinz, Harry van der Hulst, *The Study of Word Stress and Accent: Theories, Methods and Data*, Cambridge: Cambridge University Press, 2019, p102-143.
- (36) Ross, Jaan, Lehiste, Ilse, *The Temporal Structure of Estonian Runic Song*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 2001.
- (37) Fox, Anthony, *Prosodic Features and Prosodic Structure: The Phonology of Suprasegmentals*, Oxford: Oxford University Press, 2000.
- (38) 松村一登, 宮野恵理, *まずはこれだけエストニア語*, 東京: 国際語学社, 2012